

実習期間中における養護実習生のリーダーシップに 関する研究 (2)

松本敬子・古賀由紀子・岩坂いずみ・佐方仁美・吉田道雄

A Study of Leadership in Student Teachers' of School Health during Practice Teaching (2)

Keiko MATUMOTO, Yukiko KOGA, Izumi IWASAKA, Hitomi SAKATA and Michio YOSHIDA

(Received September 2, 1996)

問 題

年々多様化, 複雑化する健康問題に対して養護教諭は, 唯一の専門職として学校保健活動の展開・推進に中心的役割を果たしていかなければならない。そのためには, 人や集団・組織と積極的にかかわり, 学校内外でリーダーシップを発揮していくことが求められている。

これらの能力について松本ら (1987) は, 養護教諭の教師及び教師集団へのリーダーシップ行動を明らかにし, さらに養護実習生の行動から養護教諭の児童生徒と教師双方へのリーダーシップ行動を分析している (松本ら, 1993)。

こうした研究では, 養護教諭の専門的知識・技術であるテクニカル・スキルと, 対人関係を良好にするための知識・技術としてのヒューマン・スキルの重要性が指摘されている。

また実習期間中における養護実習生のリーダーシップに関する研究 (1) では, 実習生の知識や実習での経験を基に養護教諭の役割・行動・態度の項目を可能な限り収集し, それらの項目を「対教師行動」「対児童・生徒行動」「教師, 児童・生徒双方にかかわる行動」に分類・整理するとともに, 各行動についてその重要度を測定した。その結果, 対教師行動では, 「職務に自分の意見をもつ」「人の意見を生かすことができる」といったテクニカル・スキルにかかわる行動が, 対児童・生徒行動では, 「どんなことでも一度は受け止める」「児童・生徒の一人一人を大切にする」などヒューマン・スキルに含まれる行動が多いという特徴がみられた。さらに教師, 児童・生徒双方にかかわる行動では, 「自分の感性を磨く」などテクニカル・スキルとヒューマン・スキルの双方に強い関係をもっていると思われる行動が多く選択されるという特徴的な傾向がみられた。

しかし, これらの分析は, 1大学1学科の学生の知識・経験に基づくものであった。さらにこれらの研究では, 収集した多くの役割・行動を「対教師に関する行動」「対児童・生徒に関する行動」「対教師, 対児童・生徒に関する行動」の3つに意図的な分類が行われている。

そこで本研究では, 対象を4大学6学科に広げ, 因子分析によって, これら変化について明らかにすることを目的にした。行動変化に関しては, 実習1週目と実習終了時の比較と, さらに実習形態が異なる養護教諭課程と養護教諭特別別科のちがいについても検討を加える。

方 法

第1次調査（養護教諭の行動項目収集のための調査）

調査対象

平成5年度熊本大学養護教諭特別別科学生40名

調査方法

養護教諭が児童生徒および教師にとっての行動を明らかにするために、実習前後の学生に、自由記述による「養護教諭として期待される役割・行動・態度」を調査した。得られた項目をもとにグループワークを行い、新たな行動を追加して1200個の行動項目を収集した。

第2次調査（項目整理のための調査）

調査対象

平成6年度熊本大学養護教諭特別別科学生40名

調査方法

収集された1200個の養護教諭の行動のうち重複項目を除外、875項目とし、3段階評価を行い、重要度を選択した。この結果を「対教師行動」「対児童・生徒行動」「教師、児童・生徒双方にかかわる行動」項目に区分、「健康診断の実施」など「あまりに当然とされる行動」を除き、項目を625項目までに集約、整理した。

第3次調査（養護教諭実習生のリーダーシップの行動の変化）

調査対象

平成7年度4大学6課程（A, B, C, D, E, Fの6課程）の養護実習生185名

調査方法および内容

第2次調査で得えられた672項目について、養護実習生が考える養護教諭の行動の重要度順のリストを作成し、全項目に対して「対教師行動（123項目）18.3%」「対児童・生徒行動（299項目）44.5%」「教師、児童・生徒双方にかかわる行動（250項目）37.2%」の割合を踏まえ、重要度の高かった順に「対教師行動16項目」「対児童・生徒行動40項目」「教師、児童・生徒双方にかかわる行動34項目」の合計90項目を選び、今回の調査項目とした。この調査票を用い、A・B・C・D・E・Fの4大学6課程の養護実習生に、実習1週終了後と全実習終了後の2回、すべての項目について「5. 十分行った」「4. かなり行った」「3. どちらとも言えない」「2. あまり行っていない」「1. 行っていない」の5段階の中から選択するよう依頼した。

結果と考察

1. 調査項目の選択

前回の調査で672項目を集約・調整し得られた90項目の調査結果である（表1）。実習における経験・認識の高まりを考慮し、実習1週目の結果ではなく、全実習終了後の調査結果を基に因子分析を行うこととした。

2. 実習期間中における養護実習生のリーダーシップ行動の因子分析

リーダーシップ行動の90項目に関して分析を行った。分析は主因子法によって因子を抽出した

後、ノーマル・バリマックス法によって因子軸の回転を行った。因子数としては3因子解を採用した結果を表2に示す。

第1因子に高い因子負荷量を示す項目は、「38. 子供と仲良くなる」「3. 生徒とコミュニケーションをとる」「8. 生徒の反応を大切にする」「20. 児童生徒のプライバシーを守る」「7. 生徒との約束を守る」などであるが、「38.」「3.」はコミュニケーションをとって子供に、より近づく行動であり、「8.」「20.」「7.」は、子供を見守り、プライバシーや、約束を守るなど、子供を人間として大切に、信頼を得る行動である。

また養護教諭は、このような子供への直接的かかわりだけではなく、さまざまな人々へのかかわりがある。まずは教職員との信頼関係によって活動が広がり、子供たちへの指導も確かなものとなる。そこで「4. あたたかい態度で接する」「41. あたたかい人間関係をもつ」「61. 勤務時間を守る」が高い負荷量を示している。「4.」「41.」のあたたかいというのは養護教諭が人間関係を築く上の基礎的態度であり、「61.」は勤務態度の1側面で、人間性や職業観に関連するものとして、信頼にかかわる行動と思われる。

次いで高い負荷量を示す項目は、「6. 児童生徒を信じる」「2. どんなことでも一度受け止める」「9. やさしさをもっている」「13. 児童生徒の話をよく聞く」「1. 児童一人一人の個性を大切にすること」「5. 男女平等に扱う」「29. 生徒の顔と名前を覚える」がある。「6.」「2.」「9.」「13.」「1.」の子供を信じ、受け止め、1人1人の話をよく聞く行動は個別指導の基礎であり、これら行動なくしては保健室での教育活動は成立し得ないテクニカル・スキルである。

「5.」の男女平等に接することは、感じやすい思春期の子供への配慮行動である。教育の基底条件ともいえるが、思春期の子供達は、このことだけで養護教諭を評価しやすく、信頼関係に影響する項目である。また、「29.」の養護教諭がその子の名前を言っただけの声をかけ、自分を知っていて、認めてくれていることであり、人間関係はここから成り立つ。これら因子は、「人とのかかわり」の重要性を示す項目であり、「対人関係の向上を図るためのスキル」と命名した。以上は、実習生が養護教諭の態度・行動を見、そして自分が経験した事柄であるが、保健室において、その力量を発揮するためのテクニカル・スキルの中心となるものであり、これらはすべてヒューマン・スキルでもある。

第2因子に高い因子負荷量を示す項目は、「78. 職務に自分の意見を持つ」「87. 担任から情報収集を行う」「70. 自己を成長させる努力をする」「83. 他の先生から信頼される」「63. 自らの健康観を確立する」「56. 柔軟性を持つ」「79. 校長・教頭との連絡を密にする」などがある。

「78.」「83.」の明確な意見をもつこと、信頼があることは、養護教諭が組織の中のただ1人の専門職として、集団活動を行う上での重要項目である。「70.」「63.」「56.」の自己成長や、自らの健康観の確立をはかること、そして柔軟性をもっていることは、これは健康問題のリーダーとしてまた、専門的な信憑性の高いコミュニケーターとして集団維持に欠かせない条件となる。

「87.」の担任との連携は、学校組織において最も大切な行動であり、集団の健康問題把握、解決には担任からの情報が決め手となる。「79.」の校長・教頭との連絡に関しては、管理者の職務の上からも、人々の態度変容に影響を及ぼす立場からも、学校長らの理解と支援は、保健関係集団の活性化に関連する項目である。

次いで「77. うまく他教師の意見を得る」「55. 自分の意見をしっかりと言える」「88. 失敗してもくよくよしない」があるが、「77.」の人々の意見を得ると共に、「55.」の自分の意見が言えることは、メンバーニーズと、専門ニーズが集約であり、人々の自我関与が得られ、集団の凝集性を高めることにつながる。「88.」は、くよくよせずその行動を冷静に評価することで集団維持に

表1 90項目の内容と平均値、標準偏差

番号	項 目	MEAN	SD
90.	自分からあいさつする	4.21	0.92
61.	勤務時間を守る	4.14	1.21
4.	あたたかい態度で接する	4.06	0.90
5.	男女平等に扱う	3.99	0.98
20.	児童生徒のプライバシーを守る	3.97	0.94
38.	子供と仲良くなる	3.96	0.92
9.	やさしさをもっている	3.90	0.87
7.	生徒との約束を守る	3.89	0.82
6.	児童生徒を信じる	3.82	0.91
8.	生徒の反応を大切にす	3.81	0.89
80.	仕事を誠実に行う	3.79	0.90
51.	個人を尊重する	3.79	0.79
3.	生徒とコミュニケーションをとる	3.78	1.00
41.	あたたかい人間関係をもつ	3.78	0.78
67.	誠実な行動をする	3.77	0.86
2.	どんなことでも一度受けとめる	3.76	0.90
85.	人からの意見も取り入れ、自分の視野を広げる	3.74	0.89
66.	思いやりがある	3.71	0.89
39.	いいかげんな対応、処置をしない	3.68	0.87
46.	自分の仕事に誇りをもつ	3.66	0.90
13.	児童生徒の話をよく聞く	3.66	1.00
89.	人の意見を仕事にいかす	3.66	0.85
73.	聞き上手になる	3.65	0.87
29.	生徒の顔と名前を覚える	3.64	0.98
53.	偏った考え方をもたない	3.63	0.78
84.	孤立しないようにする	3.62	0.91
17.	児童生徒を傷つけないような言動をする	3.61	0.80
54.	心身ともに健康である	3.61	1.02
77.	うまく他教師の意見を得る	3.56	0.87
30.	先入観をもたないで児童生徒に接する	3.56	0.95
86.	他職員の職務を理解する	3.55	0.85
71.	専門職の意見をもつ	3.53	0.81
52.	自分の感性を磨く	3.52	0.91
42.	自ら探究心をもち、向上する努力をする	3.52	0.88
62.	自分の精神面のコントロールをする	3.52	1.09
63.	自らの健康観を確立した	3.48	0.95
56.	柔軟性をもつ	3.44	0.84
68.	個人を把握する	3.43	0.86
82.	自分の考えをもち、行動する	3.43	0.98
70.	自己を成長させる努力をする	3.42	0.93
49.	空き時間を利用して勉強する	3.39	1.00
58.	いつでも誰でも来やすい保健室にする	3.38	0.92
55.	自分の意見をしっかり言える	3.36	0.93
44.	相手に合わせた対処をする	3.36	0.93
19.	児童生徒の長所に注目する	3.35	0.96

番号	項目	MEAN	SD
64.	自らの仕事に自信をもつ	3.35	0.96
40.	救急看護に対し広い視野, 知識, 技術の習得努める	3.33	0.94
34.	一人一人の個性を知る	3.31	0.99
11.	児童が話しかけやすい雰囲気がある	3.29	0.95
26.	児童生徒の行動外見にとらわれず中身を見ていく	3.29	0.89
1.	児童一人一人の個性を大切にする	3.29	1.05
88.	失敗してもくよくよしない	3.28	1.11
10.	処置が事務的に終わらないようにする	3.28	0.91
47.	薬品や消毒について正確な知識をもって管理する	3.26	1.00
81.	児童生徒の状態を担当に連絡する	3.26	1.13
48.	豊かな人間性をもっている	3.26	0.88
22.	心の問題に目を向ける	3.23	1.06
27.	児童生徒にとって一番良いことはなにかを考える	3.23	0.97
78.	職務に自分の意見をもつ	3.22	0.88
37.	けじめのある態度をとる	3.18	0.95
43.	保健室で休養させる生徒については所在を担当に知らせる	3.17	1.23
31.	処置をしながら指導する	3.15	1.02
69.	何事も計画, 実施後の評価をし, 次の計画にいかす	3.10	0.98
87.	担任からの情報収集を行う	3.10	1.00
59.	新しい情報, 幅広い情報をキャッチする	3.09	0.88
14.	教師としての自覚をもって児童生徒に接する	3.07	0.99
65.	あらゆる場面を指導の場とする	3.05	0.98
50.	保健室の経営方針をもっている	3.05	0.91
76.	学校全体の共通理解のもとで活動する事を心がけている	2.99	0.97
21.	日常生活に即した保健指導をする	2.97	1.10
15.	授業で教えるだけでなく日常の生活の中で指導する	2.93	1.00
36.	同じけがを繰り返さないように指導する	2.92	1.11
60.	読む対象にあった保健便りを作成する	2.92	1.46
12.	適切な処置が迅速にできる	2.86	0.87
83.	他の先生から信頼される	2.85	0.84
72.	救急処置の時, 的確な連絡がとれる	2.81	0.97
28.	興味の湧くような保健便りを作る	2.79	1.46
18.	児童生徒に考えさせるような言動をする	2.78	0.88
24.	児童生徒の発達段階にあわせて保健指導をする	2.74	1.08
57.	地域の特性を踏まえた活動をする	2.69	1.10
79.	校長・教頭との連絡を密にする	2.69	1.09
16.	児童生徒が即実践できるような内容の保健指導をする	2.66	1.08
35.	健康な児童生徒に健康増進に関する指導にあたる	2.64	1.01
33.	将来の生活週間の基本が身に付くような教育をする	2.63	0.96
32.	健康に生きて行く力を子供に培う	2.56	0.96
45.	学校三師との連携を大切にする	2.46	1.20
23.	児童生徒保健委員会活動の育成をする	2.37	1.19
25.	保健室での生徒のよいところを職員に伝える	2.35	1.07
75.	他の教師も保健指導ができるよう資料提供する	1.94	1.22
74.	保護者にも処置法などの教育をする	1.86	1.18

表2 因子分析結果

番号	項目	因子負荷量			
		I	II	III	共通性
38.	子供と仲良くなる	0.79	0.32	0.18	0.75
3.	生徒とコミュニケーションをとる	0.78	0.34	0.10	0.73
4.	あたたかい態度で接する	0.77	0.32	0.16	0.72
8.	生徒の反応を大切に	0.77	0.23	0.28	0.73
20.	児童生徒のプライバシーを守る	0.77	0.16	0.20	0.66
41.	あたたかい人間関係をもつ	0.74	0.38	0.24	0.75
61.	勤務時間を守る	0.74	0.22	0.08	0.59
第1因子	7. 生徒との約束を守る	0.73	0.20	0.19	0.61
	6. 児童生徒を信じる	0.71	0.19	0.21	0.59
	2. どんなことでも一度受けとめる	0.70	0.29	0.16	0.60
	9. やさしさをもっている	0.70	0.32	0.30	0.67
	13. 児童生徒の話をよく聞く	0.70	0.31	0.23	0.64
	1. 児童一人ひとりの個性を大切に	0.69	0.33	0.26	0.66
	5. 男女平等に扱う	0.67	0.27	0.23	0.58
	29. 生徒の顔と名前を覚える	0.66	0.21	0.19	0.52
	90. 自分からあいさつする	0.64	0.37	0.13	0.57
	34. 一人一人の個性を知る	0.63	0.39	0.22	0.60
	19. 児童生徒の長所に注目する	0.62	0.29	0.27	0.54
	17. 児童生徒を傷つけないような言動をする	0.61	0.25	0.36	0.57
	30. 先入観を持たないで児童生徒に接する	0.53	0.24	0.37	0.48
第2因子	78. 職務に自分の意見をもつ	0.24	0.70	0.25	0.60
	87. 担任から情報収集を行う	0.14	0.67	0.36	0.60
	70. 自己を成長させる努力をする	0.32	0.66	0.22	0.56
	83. 他の先生から信頼される	0.12	0.60	0.36	0.51
	63. 自らの健康観を確立する	0.39	0.59	0.28	0.58
	56. 柔軟性をもつ	0.37	0.58	0.26	0.54
	79. 校長・教頭との連携を密にする	-0.01	0.58	0.39	0.49
	76. 学校全体の共通理解のもとで活動することを心がけている	0.24	0.56	0.32	0.47
	77. うまく他教師の意見を得る	0.37	0.56	0.34	0.56
	55. 自分の意見をしっかり言える	0.35	0.53	0.36	0.53
	88. 失敗してもくよくよしない	0.28	0.53	0.11	0.37
	59. 新しい情報, 幅広い情報をキャッチする	0.17	0.52	0.30	0.39
	48. 豊かな人間性をもっている	0.38	0.50	0.30	0.49
第3因子	32. 健康に生きて行く力を子供に培う	0.13	0.26	0.70	0.57
	35. 健康な児童生徒に健康増進に関する指導にあたる	0.19	0.16	0.66	0.50
	15. 授業で教えるだけでなく日常生活の中で指導する	0.33	0.20	0.63	0.55
	33. 将来の生活習慣の基本が身に付くような教育をする	0.16	0.21	0.63	0.46
	12. 適切な処置が迅速にできる	0.26	0.19	0.62	0.49
	36. 同じけがを繰り返さないように指導する	0.27	0.26	0.61	0.51
	72. 救急処置の時, 的確な連絡がとれる	-0.05	0.26	0.61	0.45
	16. 児童生徒が即実践できる内容の保健指導をする	0.36	0.09	0.59	0.49
	24. 児童生徒の発達段階にあわせて保健指導をする	0.14	0.17	0.58	0.39
	14. 教師として自覚をもって児童生徒に接する	0.27	0.28	0.56	0.47
	40. 救急看護に対し広い視野, 知識, 技術の習得に努める	0.29	0.32	0.56	0.50
寄与率		20.33	15.25	11.91	47.49

は必要事項である。これらは、養護教諭の責任として活性化せねばならない保健委員会などの集団維持活動であり、また関連集団とのリンキングピンの役割を担う養護教諭の重要なスキルである。

このように自らの活動を人や集団との関係で展開していくためのテクニカル・スキルであるところからこの因子を「集団を維持し、活性化するためのスキル」と命名した。

第3因子に高い因子負荷量を示す項目は、「32. 健康に生きて行く力を子供に培う」「35. 健康な児童生徒に健康増進に関する指導にあたる」「33. 将来の生活習慣の基本が身に付くような教育をする」「16. 児童生徒が即実践できる内容の保健指導をする」「24. 児童生徒の発達段階にあわせて保健指導をする」がある。この中で「32.」「35.」「33.」は、将来の生活習慣、知識が身につく、子供達が健康に生きていける教育の基本が示されている項目である。「16.」「24.」は養護教諭として更に、具体的な教育行動であり、実践内容や、発達段階を考えた項目である。次いで「15. 授業で教えるだけでなく日常生活の中で指導する」「12. 適切な処置が迅速にできる」「36. 同じけがを繰り返さないように指導する」「72. 救急処置のとき、的確な連絡がとれる」などがあり「15.」「12.」「36.」「72.」ともに救急処置に関連し、養護教諭の日常的、かつ個別的指導の重要視である。これらいずれも養護教諭の独自の教育活動を示すテクニカル・スキルであることから、「専門的な教育活動を示すスキル」と命名した。

こうして実習期間中における養護実習生のリーダーシップ行動は、「対人関係の向上を図るためのスキル」「集団を維持し、活性化するためのスキル」「専門的な教育活動を示すスキル」の3つの因子に分類された。

3. 全実習生のリーダーシップ行動の変化

実習1週終了後と全実習終了後に、実習生のリーダーシップ行動の5段階評価を行い、先の3因子分類をもとにして、その変化をみた。この結果を表3に示す。

因子1の「対人関係の向上を図るためのスキル」は、全実習終了後は、実習1週終了後より有意に向上を示している。「38. 子供と仲良くなる」「3. 生徒とコミュニケーションをとる」などの子供のそばに近づく行動や、「8. 生徒の反応を大切にする」「20. 児童生徒のプライバシーを守る」「7. 生徒との約束を守る」「6. 児童生徒を信じる」「2. どんなことでも一度受け止める」「9. やさしさをもっている」「13. 児童生徒の話をよく聞く」「1. 児童一人一人の個性を大切にする」「5. 男女平等に扱う」なども1人1人を大切に受け止め、子供に信頼され、子供を信じる養護教諭の主な活動であり、実習中に最も多く経験する行動である。そして「4. あたたかい態度で接する」「41. あたたかい人間関係をもつ」「61. 勤務時間を守る」も実習担当の養護教諭の行動を実際に見て感じたり、あるいは指導によって向上した項目であろう。

因子2の「集団を維持し、活性化するためのスキル」も全実習終了後には、実習1週終了後よ

表3 全実習生のリーダーシップ行動の変化

因子要因	実習1週終了後 (N=185)		全実習終了後 (N=182)		t
	AVG	SD	AVG	SD	
因子1	75.50	12.12	83.83	14.37	6.00**
因子2	41.43	7.27	47.07	8.81	6.68**
因子3	31.16	6.89	38.62	7.10	10.22**

**P<.01

り有意な向上がみられた。「78. 職務に自分の意見を持つ」「77. うまく他教師の意見を得る」「55. 自分の意見をしっかり言える」「87. 担任から情報収集を行う」「70. 自己を成長させる努力をする」「83. 他の先生から信頼される」「63. 自らの健康観を確立する」「56. 柔軟性を持つ」「79. 校長・教頭との連絡を密にする」「88. 失敗してもくよくよしない」などがある。しかしこれらの多くは、実習して始めて実感する行動であり、活動の重要事項として、ことあるごとに担当の養護教諭の指導や行動から学びがあったと考えられ伸びている。

因子3の「専門的な教育活動を示すスキル」も、実習1週終了後と全実習終了後の間に有意に向上がある。「32. 健康に生きて行く力を子供に培う」「35. 健康な児童生徒に健康増進に関する指導にあたる」「33. 将来の生活習慣の基本が身に付くような教育をする」「16. 児童生徒が即実践できる内容の保健指導をする」「24. 児童生徒の発達段階にあわせて保健指導をする」「15. 授業で教えるだけでなく日常の生活の中で指導する」は、実習で子供の実態を具体的に知り、健康に関する教育の重要性を実感したものと思われる。「12. 適切な処置が迅速にできる」「36. 同じけがを繰り返さないように指導する」「72. 救急処置のとき、的確な連絡がとれる」などは、養護教諭の日常的活動として多くを経験し、向上したものであろう。従って3因子とも実習の効果が顕著に認められた。

4. 実習の形態別のリーダーシップ行動の比較

A・B・C・D・E・Fの6課程の学生を、養護実習の形態別に分けると、養護教諭課程と養護教諭特別別科の2つのグループになる。そこでこれをIグループ（養護教諭課程）と、IIグループ（別科）とした。

1) 実習の形態別リーダーシップ行動比較（1週終了後のIグループ、IIグループ）

実習1週終了後の両グループ学生のリーダーシップ行動評価をみる（表4）。

因子1の「対人関係の向上を図るためのスキル」、因子2の「集団を維持し、活性化するためのスキル」因子3の「専門的な教育活動を示すスキル」の3因子いずれにもIグループ（養護教諭課程）と、IIグループ（別科）の間に、リーダーシップ行動の違いは認められない。調査対象となった実習は、Iグループ（養護教諭課程）の場合、2年次、3年次と教育実習を含めた養護実習を積み上げた最終実習の第1週目の行動評価である。IIグループ（別科）の場合も、最終実習の第1週目での行動評価であることに変わりはないが、1年という限られた養成期間の中で行われるものである。特に因子3の「専門的な教育活動を示すスキル」の1週目の結果については、Iグループ（養護教諭課程）の場合が有意に高いことが予想されたが、結果には差が見いだされなかった。Iグループ（養護教諭課程）とIIグループ（別科）の学生が、1週目で既に差がない理由として考えられることは、後者は、養成が1年であることで、実習までの僅かな期間に養護活動

表4 実習形態別リーダーシップ行動の比較
(実習1週終了後のI・IIグループの比較)

因子要因	Iグループ (N=64)		IIグループ (N=121)		t
	AVG	SD	AVG	SD	
因子1	75.42	9.70	75.54	13.22	0.07
因子2	40.16	7.38	42.10	7.11	1.73
因子3	30.44	7.14	31.55	6.71	1.04

**P<.01

に関する講義が集中的に行われることによるのかもしれない。

2) 各グループ別, 実習1週目終了後と全実習終了後の変化

Iグループ(養護教諭課程), IIグループ(別科)の実習1週目終了後と全実習終了後の, 3因子からみた変化を表5, 表6で比較してみる。

表5 Iグループの実習1週終了後と全実習終了後の比較 (N=62)

因子要因	実習1週終了後		全実習終了後		t
	AVG	SD	AVG	SD	
因子1	76.19	8.79	83.44	13.34	3.70**
因子2	40.34	7.43	46.27	7.36	3.31**
因子3	30.37	7.08	37.05	6.10	5.79**

**P<.01

表6 IIグループの実習1週終了後と全実習終了後の比較 (N=116)

因子要因	実習1週終了後		全実習終了後		t
	AVG	SD	AVG	SD	
因子1	75.73	12.89	83.95	15.01	5.10**
因子2	42.18	7.15	47.70	9.51	5.23**
因子3	31.46	6.66	39.47	7.47	9.46**

**P<.01

因子1の「対人関係の向上を図るためのスキル」に, 因子2の「集団を維持し, 活性化するためのスキル」, 因子3の「専門的な教育活動を示すスキル」の3因子のいずれかに, Iグループ(養護教諭課程), IIグループ(別科)の特徴が出てくることを予想していた。しかし両グループとも, それぞれに最終実習の向上は著しいが, Iグループ(養護教諭課程), IIグループ(別科)の間には, どの因子においても実習1週目終了後と全実習終了後の変化に差がなく, いずれも等しく養護実習を通してリーダーシップ行動の高まりが見られる。

3) 実習の形態別リーダーシップ行動比較(全実習1週終了後のIグループ, IIグループ)

全実習終了後の両グループ学生の実習リーダーシップ行動評価をみる(表7)。

因子1の「対人関係の向上を図るためのスキル」, 因子2の「集団を維持し, 活性化するためのスキル」, 因子3の「専門的な教育活動を示すスキル」の3因子いずれにもIグループ(養護教諭課程)と, IIグループ(別科)の間に, リーダーシップ行動の違いは認められない。

実習体験は, 「対人関係の向上を図るためのスキル」「集団を維持し, 活性化するためのスキル」

表7 実習形態別リーダーシップ行動の比較
(全実習終了後のI・IIグループの比較)

因子要因	Iグループ (N=63)		IIグループ (N=119)		t
	AVG	SD	AVG	SD	
因子1	83.63	13.33	83.93	14.89	0.14
因子2	46.25	7.30	47.50	9.47	0.98
因子3	37.11	6.07	39.41	7.41	2.23

**P<.01

「専門的な教育活動を示すスキル」の3因子いずれのリーダーシップ行動にも大きな向上をみせた。この向上は、どの課程においても、実習形態に差はあっても変わらず、いずれも、理論を実践してみることによってリーダーシップ行動は高まり、更に経験が自信を育て、これら評価につながったと考えられる。

要 約

先の研究で重要度を確かめた90項目について、養護実習生に対して、養護実習1週終了後と全実習終了後の2回、5段階評価による調査を実施した。

これらについて因子分析を行い、実習期間中における養護実習生のリーダーシップ行動、3因子「対人関係の向上を図るためのスキル」「集団を維持し、活性化するためのスキル」「専門的な教育活動を示すスキル」を明らかにした。

養護実習生の実習1週目と全実習終了後のリーダーシップ行動を比較した結果、先に分類した3因子ともに有意差が認められ、各因子を向上させる実習効果が明らかになった。

一方、養護実習生を実習形態別に2グループに分類しての比較では、実習1週目終了後の2グループ間、全実習終了後の2グループ間では、リーダーシップ行動の有意差が認められず、課程の違いや、実習形態に差はあっても、実習経験が自信を育て、リーダーシップ行動の向上につながると見られ、学校実習の効果は大きい。

参 考 文 献

- 三隅二不二 1978 リーダーシップ行動の科学，有斐閣。
- 松本敬子 1987 養護教諭の現代機能に対応する養成の課題，学校保健学会誌 29(2)，53-61。
- 松本敬子 1987 養護教諭の現代機能に対応する養成の課題，学校保健学会誌 29(7)，303-308。
- 松本敬子 1988 新しい養護教諭像と現状との関連，学校保健学会講演集誌 Vol 30，215。
- 松本敬子 1991 連携，小倉学，堀内久美子編「これからの養護教諭の教育」，78-81。
- 松本敬子 1992 学校保健活動の活性化と継続性—組織的活動において—，学校保健会誌 34(2)，61-67。
- 松本敬子 1992 養護教諭養成における学校保健活動の視点，学校保健会誌 34(3)，114-120。
- 松本敬子，吉田道雄 1993 養護教諭実習生リーダーシップに関する実証的研究，熊本大学教育学部紀要 人文科学 42，199-208。
- 松本敬子，吉田道雄他 1995 実習期間中における養護実習生のリーダーシップに関する研究(1) 熊本大学教育学部紀要 人文科学 44，209-217。